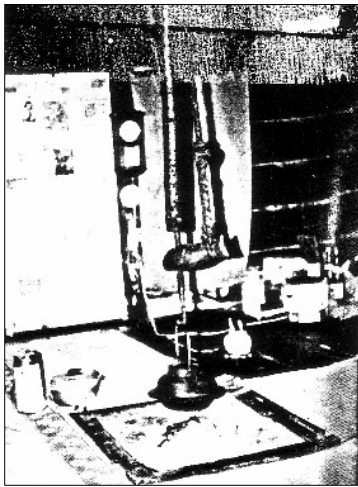


「昔の生活をふりかえって」 (その1)

前回と前々回では、「衣」と「食」について書いたので、今回は、「住」について書くことにする。それも、この地方の特色とでもいうことを……。

1 この地方には「イロリ」がなかった



「ともしび近く衣ぬう母は、春の遊びの楽しさ語る。
居並ぶ子どもは指を折りつつ、日数かぞえて喜び勇む。
囲炉裏火はとろとろ、そとは吹雪。」は、
私が小学校で習った唱歌“冬の歌”(明治40年頃
の作)の一節である。

このイロリは、明治の半ば頃まで全国の農山村で
つかわれ、暖房・炊事・照明などの役割を果たしてい
たのである。しかし、この地方にはイロリはなかった。
ある書物によると、岡山県南部の平野地域では、かつて
イロリがあったかどうか確証がないと書かれている。

私たちはこどもの頃、イロリのことを知らずに“冬
の夜”の唱歌をうたっていたわけである。

2 イロリのなかったわけは？

寒い冬でも、県北より暖かかったということもあったかもしれないが、第一の理由は燃料であると思われる。当時、この地方の自給の焚きものといえば、稲わらか笹力瀬川に自生する葦くらいのものであった。(備考付記)山村のようにイロリで燃やす雑木とか木の枝などの燃料が自由に得られるところではなかったのである。

現金収入は少なく、自給自足の経済生活を強いられていたこの地方の農村に松や槇の割り木が買えるようになったのは、明治も中期以降でい草の栽培が本格的になってからではなかろうか。(この地方で、丈の長い良質のい草がたくさん作れるようになったのは、日露戦争後、い草栽培にとって欠かせない肥料としての大豆粕が満州から自由に輸入されるようになってからだとの推量による。)

備考 この地方での炊事用の燃料は、前述のように稲わらや葦(このあたりではヨシと呼んでいた)であったが、そのほかに籾殻(別名スクモ)がつかわれていた。

ただし、この籾殻を燃やすにはカマドの焚き口に特別の装置(ドストル)を必要としたので、籾殻が燃料としてつかわれるようになったのは大正時代からではないかと思われる。

3 イロリのある住生活の特徴

イロリのある無しによる住生活の相違を述べたいのであるが、まずイロリのある家の構造を見てみたい。(私には経験がないので、書物に頼ることしかないが)

(1) イロリのある場所

イロリは、表の土間からあがったすぐの広間とか台所の中央に設けられていた。

(2) 火の用心には

部屋の中で火を焚くのであるから、火災が一番心配である。そのため木の枠か竹で編んだ棚を梁からイロリの上につるして火の粉が天井にとび移らないようにしていた。またこの棚に濡れた衣類や雪靴を乾かす役割をも持たせていた。

(3) イロリのある部屋は仕事をする部屋、家族団欒の部屋でもあった

イロリのある部屋は、通例食事をする場所であるが、家の中で一番明るく暖かい場所なので、寒い日や雨天のとき、また夜は、主人はここで縄をなうなどの藁仕事をし、主婦は針仕事をする場所となる。また子どもたちとの団欒の場になっていることは「冬の夜」の唱歌のとおりである。

(4) イロリのある部屋は清潔にならない。

火を扱うが煙突はない。そして仕事部屋でもある。汚れないようにしようと思っても無理である。

この部屋には、畳でなく蓆(むしろ)が敷かれていたり、莫座(ござ)が敷かれることになる。

おことわり

この次に本論のこの地方の住生活のことを書く筈であったが、予定のスペースがなくなったので次回にゆずらしてもらう。悪しからず。

平成8年4月号 第38号

(中 尾 佐之吉)